

久米賞 正賞 受賞作品

## 月と呪文

郡山市立郡山第五中学校

### 新月―マニユアルを求めて

これから僕はどうしたらいいか  
何処へ向かっていいこうか  
自分に対するクエスチョンマークを  
たくさん抱えている  
誰にもわかつてはもらえないのだ  
と諦める……  
中一の冬、僕は真つ暗な森の中を歩いていた  
そこは星の光も届かない場所  
全てが手探りの毎日  
地面から盛り上がって出た木の根に  
何度も躓いて転んだ  
木の枝に容赦なく引っかかり  
体中の傷口から血が流れる

ここは何処なんだ  
なんでここにいる  
それでも光を求めて歩き続けた  
光と見まがう動物の目  
心が虚ろだと体が不調なのは本当だ  
学校の保健室の常連だった  
月曜日は特にだめ  
学校がだめなんじゃない  
家にも友達にも居場所が見つからない  
見つからないんだ  
保健室のベッドで夢を見た  
自分の内界が何かに征服されていく  
悪夢だった  
ポケットから落ちたバターナイフ  
先生が心配し  
親が呼ばれる  
理由はないのだ  
答えるのが  
面倒になって僕は黙る  
真つ暗な森はいよいよ僕を飲み込む気だ  
このまま崖から落ちていくのだと思った  
こういうときにどうすればいいのか  
だれか教えてくれないか  
こんな僕に生きるマニユアルを与えてほしい  
それがあれば

きつとラクになれるのに  
わからない 見つけられない  
焦り もがく

メールの着信音が鳴る  
友達からのさりげないエール  
短いことばだけどやさしさがあるよ  
真つ暗な森に風が吹く  
空を覆っていた厚い雲が動き出す  
今宵は新月  
暗がりの中でなにかが始まり  
なにかが動き出す予感

## 夢の途中――

真つ暗な森の中に  
ぼつかりと空いた空間が現れる  
風が吹いて雲が動く  
三日月が少し顔を出す  
かすかな光

友達の間が見える  
だれかがだれかに振られたらしい、  
今度の彼らの新曲はちよつといいよ、  
俺の誕生日にこれちよつといいよ、  
高いよ、  
なんて、

たわいもない話  
そして  
ちよつとだけ まじめな話もする  
夢について

描いた夢は叶えたくても  
叶わないことのほうが多いけど  
僕らはいつもおおまじめにユメを語る  
ユメは夢の卵

物理的には何の不自由もない  
この時代でさえ  
夢を叶える呪文や魔法はないから  
自分で何とか探すしかないのだ  
ユメは熟す前の葡萄の房

たまに来る幸運や  
小さな成功  
孤独感に打ちのめされるできごと  
保健室のベッド  
早退の連絡票  
母親のため息  
そんなものが必要だったと  
ユメは僕に語りかけるだろうか  
ユメはまだ仮縫いのシャツ  
それでも僕よ

夢を持つことを恐れるな  
描いた夢に潰されなくてくれ  
未完成のユメはちゃんとここにある  
僕らのたわいもない話の中に

自信がない 半信半疑  
挑戦したい 勇気を出せ  
不安である 未来が待っている

僕の後ろで真っ暗な森が  
ざわざわと音を立てる  
戻らない 昨日には  
進もう この先へ  
とりあえず 前へ 君も、ね。

## ベースボール・メモリー

2017・7・24  
野球の県大会が終わった  
1対0で負けた  
あの日 僕らは思い切り泣きじゃくっていた  
なんでここまで泣くのかと  
自分でも意外なほどに  
時間が止まったみたい  
敗北が生んだ悔しさ  
現実の絶望

今更の後悔

そんなに一生懸命、まじめにやってきたか  
そんなに優先順位が上だったか  
これほどまでに喪失感があることを  
予想できたか

大きな目標を掲げた割に  
いくつもの壁にすぐ負けそうになった僕たち  
そんな僕たちを

監督は最後まで引っ張ってくれたよ  
誰も途中で辞めなかった部活  
一番危なかったのは  
僕かもしれない……

野球に関わっているのが好きな父  
いつも僕はこの人に見守られてきた  
父の居場所は休日の校庭だったのだろう

友達は高校でも野球をしたいと言った  
すごいね、甲子園行きなよ  
お前もいつしよにやろうよ、  
わからないよ

真っ暗な森を抜けたら  
大きな川がくねくねと横たわり  
いくつもの橋をかけて渡った  
なんとかしようと思えたと考えた中二時代  
休み時間ごとに三階の廊下に集まった僕ら

何を話すでもなく  
何をすることもなく

中一の春 小さな奇跡のように仲間となった僕ら

中二の秋 優勝を逃した

中三の春 もう巻き戻せない仲間となって

ここにいる僕ら

そして中三の秋が来る

それぞれの進路に向かっていく秋

高校でも野球、

高校では勉強、

高校ではバイト？

夜、テスト勉強をする いい月夜だ

ぽっかりと浮かんだ満月

野球のボールのようだな

みんな勉強してるかな

どうする？

友達の声が聞こえた気がした

三者面談の進路希望用紙に

とりあえず高校進学と書いた

理由は未記入のまま

一人でいたら

よくないことも考えて

真つ暗な森に迷い込む

おまけに自分が

壊れてしまいそうになることもある

それを知ったあの冬

森の暗闇に潰されそうな僕に

そつと手を差し伸べてくれたのが彼だった

彼にも暗い森はあったのに

理想とか夢のような形のないものを

いっしょにちゃんと見てくれた

空を覆う雨雲を追い払い

夜空を三日月の光で照らしてくれた

「もつとテキストにやりなよ」

彼の言葉が呪文のように

彼の身体に沁み込んでいく

母もそうだ

こんな僕のせいで

母の心はやまない雨が降り続いてきたのに

「雨が降るなら傘をさせばいい」と

そんな呪文を教えてくれた

そんな二人の言葉が雲を払ってくれたかな

窓を開ける

夜の冷気が部屋になだれ込む

今宵は三日月

## 月と呪文

誰だって

久しぶり

月明りが綺麗だと思った

欠けている部分を空に向かつて

シャープペンシルでなぞってみる

もつとテキストにやってみるよ

## Moon Night

姉はまじめで正しい

姉は努力家で夢に向かつて一生懸命だ

夢は助産師になること

きつとなれるよ、いい助産師さんに

だけどもつすぎるのもたいへん

だから疲れちゃうんだよ、時々ね

僕みたいにもう少し手を抜きなよ

テキストにね

新しい何かを探す旅は

誰も歩いたことのない道のようなもの

標識もなく目印もない

新世界は手探りで歩く真つ暗な

森のようなもの

希望という動力源がすべての旅

疲れて眠る姉を横目で見ながら

詩を書く

僕らは大切なものをなくしてから

その大切さに気付くって

昔の人は偉大だ、言われたとおりだ

詩を書くことで僕は何を探しているか

探したものはいつも自分の中にある気がして

雨が降ったら傘をさせばいいって

本当に思えた

詩を書く

姉が起きたした

また勉強するんだな、体壊さないでね

テキストな僕は

せめて姉の背中にそんな言葉をかける

そう、今が正しいかなんて

未来でしか決められないよ、つて

詩に書いた夜

空を見上げた僕を

月が見ている

そつと見ている

四十六億年も前から

月はそこにあったこと

僕は今日国語の教科書で知った

(指導教諭／柳 沼 智 恵)

### 《作品の意図》

自分をずつと見てくれた存在として「月」を設定した。自分を変えて

くれた言葉を呪文のようにくり返した三年間の心の軌跡を詩に書いた。  
新月―マニユアルを求めて……一年生のときの悩んでいたときの詩  
夢の途中―……………友達と夢について

ベースボール・メモリー……………部活での自分について

月と呪文……………自分の内の大切な言葉について

Moon Night……………月と姉について

### 《作品の寸評》

中学校三年間の集大成として、自分自身との葛藤の日々を振り返り、強く前向きに進もうとする現在の自分に至るまでの心の軌跡が表現豊かに綴られた作品である。「月」をテーマとして五篇が巧みに構成されており、また、随所に家族や友達のエピソードを盛り込み、「月」と同様に自分を支え、導く存在として表現している。

「新月」では、／僕はどうしたらいいか／何処へ向かっていこうか／誰にもわかってもらえないのだ／生きるマニユアルを与えてほしい／と、苦しい時期をよく言葉にした。「夢の途中」は、表現可能な強い願いを「夢」、まだ届かない憧れを「ユメ」と区別し、「ユメ」から「夢」へとという気持ちの変化を「新月」から「三日月」への変化と対比させている。「ベースボール・メモリー」は、部活動の仲間との思い出と絆を力に、受験に向かっていこうとする思いを「満月」とした。「月と呪文」は、「彼」「母」の言葉が呪文となり、雲を払い、「三日月」が現われたと表現しており、テーマに沿った構成員の高さに感心する。「Moon Night」は、「新世界」を目指し、「希望」をもって進もうという自分の思いを言葉にした。

夜空の月は「新月」から「満月」へと姿を変え、優しい光で作者を見守り続けることだろう。

(審査員／齋藤 ゆきい)